

当代中国愛書家列伝 1

謝其章

蔭 山 達 弥

〈Summary〉

Book lovers fall into two types. The former collect books for study and writing, the latter collect books for book collecting. Xie Qizhang comes under the latter, but he is different from other people in writing.

Xie Qizhang is a well-known Chinese book lover in Beijing, China. He keeps a diary about hunting for rare books and magazines at secondhand bookstores or a vegetable market from 1986. He has written a lot of books on hunting for rare books and magazines. Xie Qizhang's books show his affection for books.

It is my great pleasure to introduce that well-known modern Chinese book lover, Xie Qizhang.

1. 虎の尾

「書齋ではなく、本の巢だ。」謝其章の家に近づくと、彼はこのようにして自分の書齋に注釈をつけた。彼の書齋を目にして、ようやく‘巢’という字で書齋を形容し、それが却って真に迫っていることが分かる。部屋は小さく、約6平方メートル、部屋の小さな机を除いて、この書齋の周囲はすべて謝其章の“宝物”が積んである。人がもしこの部屋に近づいたら、すぐに本に抱かれているような感覚を覚えるだろう。

仲間うちでは、謝其章は自分の書齋をふざけて“虎の尾”と呼ぶ。魯迅の北京の書齋を虎の尾と呼んでいるが、謝其章の書齋は形状のうえで魯迅の虎の尾と似通ったところがある。書齋は小さいが、謝其章は明らかに‘巢’の中で楽しんでいる。

謝其章は言う。「自分の書齋を“虎の尾”と名付けたのは、書齋の形状によるだけでなく、書齋の一つの特性は使用中でなければならないという魯迅の言葉にとっても賛同するからである。かなりの人の書齋は飾りにすぎないが、本当の書齋は使用しなければならず、本を保管するだけではなくて、読書をしなければならず、それでこそ本当の書齋、使用中の書齋なのだ。謝其章の書齋はこのように使用中の書齋であり、毎日彼は一日の大半を時間を費やして、書齋にひきこもって、本を読み、執筆する。

“虎の尾”の少し皆と違う点は、ここの大部分の本棚、机、本箱はすべて謝其章の手作りで、彼が自分で金槌を打って作られたものである。彼が自分で言っているように、彼は机や本箱にちょっと夢中になるくらいがあり、自分の手から生まれたものだけが、安心して心から愛する書

籍をその上に並べることができるようである。謝其章はさらに笑って言う。以前平屋に住んでいた時は、自分の家から出る金槌の音で、上や下のご近所が咎めることはなかった。今は二階建て以上の建物に住んでいるので、自分で大工をすることはできず、ちょっと慣れていないようである。

皆は書齋については話すが、書齋の机について語る人はめったに見ない。実際書齋の机はとても面白いものである。「書齋の机を私は無にしない」という上手く言っている言葉がある。私はどの書齋の机にも、思い入れがある。書齋の机や本箱に対する愛情は、やはり謝其章の本に対する夢中ぶりに端を発している。本、机、本箱が彼の書齋生活の全体を構成し、一つとして欠けてはだめだ。毎日謝其章は書齋を使用しているのではなくて、それを眺めているのだ。かつてある友人が謝其章に彼の空き部屋でものを書くように言った。彼はそこは静かで執筆にわりと合っているといていた。実際のところ、謝其章はこの部屋を離れると少しも書けず、自分は全然普段どおりではない。ひょっとすると朝な夕なに一緒にいて、期せずして一致してしまったのかも知れない¹⁾。

2. 二十年来続く書物購入日記

謝其章に本を集めるようになったきっかけについて尋ねると、彼はゆっくりと答えて言う。「何も訳はなく、ただ自分が好きなのだ。」それは一種の生まれつきの趣味のようである。ただ読書が好きなのだ。謝其章は言う。彼の父親は読書が好きだった。しかし兄弟三人のうちで、自分だけが父のこの趣味を受けついで。前の世紀の八十年代以前は、謝其章はほとんどの人と同様に、読書は好きだが、買える本は、読める本は非常に限りがあり、八十年代以降になって、謝其章の書物購入経歴がようやく本当に始まった。

「どの人の思いの中にも、火種がひとつあり、ぴったりしたものに会おうと、この火種は広がる。僕が本を買い、本を集めるのもそのようなものだ。」と謝其章は言う。

北京の街のそれぞれの書店はとっくに謝其章に行きつくされていて、どこの書店にどんな本があるか、どこの書店の特色は何か、彼は手のひらを指すかのようによく把握をしている。しかし、彼が一番よく知っていて、一番行きたがるのはやはり潘家園²⁾だ。週末になるといつも、謝其章は朝早くから潘家園に駆けつけるのは、長年に渡って変わらない。「以前は本を漁り、本を買うだけだったが、現在より多いのは友人に会って、皆で一緒にほらを吹くことだ。」本を買い、本を集めることで、謝其章は多くの愛書家と知り合った。潘家園はこれら愛書家の拠点であり、謝其章は友人たちとここで一緒に本を漁り、一緒に自分が手に入れた本の情報について無駄話をする。「皆は冗談を言って、もし潘家園にタイムカード機を置いたら、僕はきっと皆勤だろう。もし誰かがそこで僕に会いたければ、大きなラッパを持って呼べば、僕には聞こえるよ。」これらを語ると、謝其章は満面に興奮する。

この習慣が一種の生活になると、謝其章の日記にも自分が本を漁り、本を買うひとしずくで一

杯になった。彼は本の山の中から、一冊の簡単で質素な小さなノートを広げる。このノートを開くと、びっしり詰まった文字に謝其章二十年余りに渡る読書生活が記録されている。いつどんな本を買ったか、どの書店に新しい本が入荷したか、ある本の価格…

謝其章にとって、毎日自分が買った本、読んだ本について記録することは、もはや一種の欠くべからざる生活の一部になっている。そしてこれらの日記は、彼が本を伴侶とする生活を記載し、証言している。「実際これらの日記は謝其章個人のことを記録しているだけでなく、今これらの日記を紐解くと、二十年余りにわたる社会の変化を見てとることができる。人々の生活、図書出版にかかわらず、これらの日記からそれらの発展の軌跡を目にすることができる。皆ごく些細な生活の一滴かもしれないが、これらの滴の背後から、とても面白いものに気づく。」³⁾

3. 古い画報から風景を眺める

北京の愛書家の中では、謝其章が所有する古書、古雑誌はかなり有名である。さらには古い上海の画報、古い漫画雑誌などの蒐集において謝其章は第一人者に挙げられる。

謝其章は言う。図書を集めるには必ず分野を持たなければならない。そして謝其章の蔵書は主として四つの分野に分かれる。1930年代の漫画雑誌、映画雑誌、1930年代の画報及び占領地区の文芸刊行物、あらゆる張愛玲作品の出版物である。謝其章は自分が所有している古い雑誌を細心の注意を払って透明な文書袋に入れ、きちんと整理している。彼はこれらの黄ばんでいる骨董を人に見せることは稀である。しかしもし知り合いに会ったら、彼は自分の所蔵品を取り出して、一つ一つ皆に見せ、見せながら、古い雑誌古い刊行物の話を語る。

どの話も謝其章の口から出ると、素晴らしく、不思議な話になる。

古い上海画報の表紙のほとんどが十里四方の租界の情景が描かれている。一人の男と女が赤い灯火と緑の酒の街角に立って別れを惜んでいる、一人の若い美貌の女性が帰ってくる夫を待っている。…雑誌は数十年前のものだが、表紙の色は依然として明るく美しくてまばゆい。謝其章は言う。彼がこの十里四方の租界の感覚に目をかけているので、彼を笑って新鴛鴦胡蝶派⁴⁾ だと言う人がいる。謝其章は他の人がこのようにふざけて言うのを気にかけない、これらの大勢の人に見ても無視される古い雑誌の中から、たくさんの我々が再び持てないであろうものを見つけることができる。それは豊かで多彩な、活発な、芸術の分野で各種の形式やスタイルが自由に発展することだ。

談話の中で、謝其章はいつも自分がコレクションしている一冊の漫画の本を取り出す。この本の中で、ある漫画家が『魯迅奮闘史』と名付けたシリーズの漫画を描いた。当時であっても、現代であっても、このような漫画は著名な作家魯迅に対する一種の冗談や諷刺と看做される。しかし『魯迅奮闘史』が気前よく漫画雑誌に載ることは、少しもタブーではなかった。「もし現在であれば、我々の漫画家はこのようなものを描くとは限らないし、描けたとしても、雑誌に載るとは限らない。」謝其章は言う。1930年代の漫画はかつて人に唐詩、宋詞と肩を並べると言われた、

このような言い方は必ずしも正確ではないかもしれないが、当時の漫画がどれほど生き生きとして素晴らしかったかを証明するに足る。「1930年代の漫画の時代は二度と戻ってこない。」このような例を謝其章はさらにたくさん挙げることができる。彼はこれらを「古い時代の文芸の息吹」と称している。この息吹は自由で、豊かで、活発で、制限がない。彼が夢中になるのはこのような息吹なのだ。「これらの正真正銘の古い雑誌を見たことがない人は、それらの歴史の味わいがどんなに深いか、理解できないだろう。」謝其章は言う。たくさんのものが人におろそかにされた、しかしこれらのおろそかにされたものは二度と複製できないのだ。それらの古い画報、古い雑誌の装丁、デザインは皆わずかなことでもなおざりにせず、画報の表紙は皆豊かで多彩な社会絵巻である。現在の雑誌はほとんどが紋切り型の美女の表紙で、両者はまったく比べものにならない。ここまで言って、謝其章はとても残念がる。

謝其章は言う。使うためにコレクションする。それで彼は自分が目にかけている各種の画報の表紙を本にし、どの表紙にも、その表紙の背後にある物語を文字で配置した⁵⁾。

「どの表紙のも一つの風景があり、僕は皆にこれらの美しい風景を見てもらいたい。」今年(2010年)は中国映画100周年であり、たくさん謝其章がコレクションしている古い映画雑誌も、役に立った。謝其章は自分のこれらの「古紙」と称するものがより多くの人に見てもらい、より多くの人に楽しんでもらえることを特に喜んでいる。

「彼らは私が古い社会から来た人だと言う、実際、僕は古い紙の山で生活をしている。僕の暮らしの楽しみはそれらから来ている。」³⁾

4. 私は蔵書家ではない

謝其章は親友であり、周作人研究者として著名な止庵との対談で、蔵書家というレッテルを貼られたくないと、次のように述べている。

「2006年より新浪網に謝其章のブログが開設された。しかし名前は謝其章ではなくて、蔵書家謝其章になり、蔵書家の身分になってしまった。蔵書家という言葉は、辞海でも調べられず、小さな辞典、大きな百科事典にもない。この‘蔵’という字を靈魂のように私の体に付けられてしまったが、僕は蔵書家、特にこの家の字を放り投げてしまいたい。今では書物愛好家か何やら名付ける人がいるが、これは持ち上げ過ぎのような気がする。」(抄訳)⁶⁾

注

1) “中国藏书家” 简介：谢其章 http://zixun.kongfz.com/article_60.html

机については、謝其章は《书桌，希望我不负你》という一文を執筆している。(謝其章《蠹鱼集》広西師範大学出版社2008.所収) 以下は第一段落の訳。

「二十余年余り前、家の中には執筆専用の机はなく、食卓が一台だけあった。執筆するときには自分で作った酒を入れる棚を引っ張って来て、一番上の引き出しに合板を置いた、それが僕の最初の机だ。それから木材加工を学んで、自分で“两头沉”と俗に言う書斎机を一つ作った。三つの引き出しの中間にある平たい引き出しが、とても実用的で、自分でデザインし、自分で作り、自分専用にした。この自家製の書斎机で四年間一日の公休日もとらず、夜間大学を卒業した。それから僕の娘もこの机で有名大学に合格した。去年大掃除をして、それを売ってしまった。買い取り業者は五元くれたが、別れるのが忍びがたく、こっそりその平たい引き出しを残して記念にした。この平たい引き出しは僕のオリジナルな発想で、よく見ないと引き出しが無いように見える。これも外国のライティングディスクの‘隠れ引き出し’から学んだものだ。新居に引っ越してから、千円余りを払って、大きな書斎机を買った。本物の木で、どっしりしている。」

- 2) 北京の骨董市で圧倒的な規模を誇る潘家園旧貨市場は土日だけ開かれる。この市場は素人だけでなく、一流ホテルのアーケードに店舗を構える骨董店の店主たちも買い付けに訪れる。彼らがやってくるのは日の出前から。売り手はもちろん、こうしたプロの買い付け人たちも繰り出すのは朝早く。いいものは早いもの勝ちだから、人出のピークは8時前くらいまで。(原口純子著『北京上海〔小さな街物語〕』JTB 2003.)
- 3) “中国藏书家” 简介：谢其章 http://zixun.kongfz.com/article_60_2.html
- 4) 鴛鴦胡蝶派は清末民国初期に隆盛であった小説流派。この流派の小説は上海を大本营とし、五四運動以降、全国ではやり、その作品も新聞雑誌紙上で一時期にぎやかになった。主なメンバーに包天笑、周瘦鵬、天虚我生、王鈍根、李定夷、徐枕亚などがいる。その作品の多くは文言文でもって、恋愛、男女の愛情、武侠、神仙と鬼神、探偵、宮廷、家庭、内幕などを題材とする物語を描く。よく鴛鴦と胡蝶で描かれる才子佳人を例えるので、鴛鴦胡蝶派と言われる。(『中国現当代文学辞典』遼寧教育出版社 1989.)
- 5) 謝其章著『封面秀』作家出版社 2005.
- 6) <http://book.sina.com.cn/news/a/2013-05-10/1445465996.shtml>

